

原子爆弾と後遺症

一瞬で終わらなかった。

「死」より苦しい世界。

誰も立ち寄れない。助けられない。

1945年8月6日…

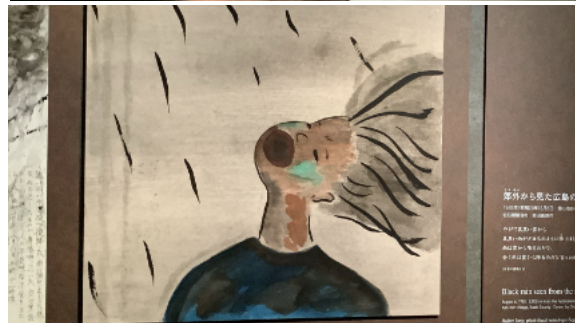
たった**1つ**の小型車ほどの爆弾が広島上空で爆発した。**一瞬**にして町を飲み込み建物や自然。そして、**人生**さえも**変形**させてしまった。大抵の方々は原爆の恐ろしさをこう思い浮かべる。僕もそうだった。しかし、この研修で原爆の**本当**の恐ろしさを知った。

この原子爆弾の最大の特徴と言えるのが、名前にもある**原子の力**だ。**ウラン**からなるその力は摂氏**4000度**、爆心地の真下は**壊滅**し、**秒速300m**もの爆風があったと言われていて、物凄い威力と感じれる。そして、何より恐いのは、**放射性物質**である事だ…。

いつまでも襲ってくる…

一瞬で全てを消した原爆は**いつまでも**被爆者の命を狙っている。僕がそう感じたのは平和記念資料館に展示された写真や実物の数々だった。1つ目は**死の斑点**だ。これは、**ウラン**から出た**放射線**により、血中の血小板が減少し、**皮下点状出血**と呼ばれる斑点のように皮下出血する状態で、白血球の減少により**白血病**などの**深刻な病気**になり死んでしまう症状なのだ。爆心地から遠くとも放射線は**襲ってきた**のだ。2つ目は**黒い雨**。原爆投下10分後、全身の火傷を、また、猛烈な喉の渴きを癒すために浴びたのは**原油**のような黒い黒い雨だった。これは、爆発で吹き飛んだ**ウラン**や爆風で舞った**土砂**がきこの雲に乗り地上に降り注いだフォールアウトの1つだ。これが原因で後に死の斑点や**数十年後に癌**ができるのだ。実際に被爆者の中に後々癌が発症した方もいる。それは後に差別され、その悲劇は家族にも及んでいった…。

半田中学校
渡邊 翔



振り返って…

今、ウクライナとロシアの終わる気配の無い戦争でロシアが核兵器を使った時、どれだけの人々が悔やみ、悲しみ、苦しむだろう。原爆投下後の世界なんて今まで考えがつかなかった。78年という少し遠い年月の限られた場所の出来事を身近に教えてくれる人はいなかった。この研修をきっかけに当時の姿から変わり果てた原爆ドームや数々の展示品が、僕に核兵器の恐ろしさや醜さを訴えていた。原爆・戦争という醜い争いをこれ以上広げてはならないと、心の奥底まで染みわたった。そして、原爆の記憶が皆んなから消える前に、平和の心を忘れないようにしたいと強く思った。広島で始まり長崎が原爆投下最後の地になるよう、この経験を活かし、まず身近な人から、やがて日本に語り継ぎたい。